

土壌消毒に低濃度エタノール

花き欠株率1%未満

農研機構 ポン

率は、3年で同0.56%まで減った。坂東氏は「フィルムを取った後は土壌を動かさないことがポイント」として、畝を立てた後の消毒処理を勧める。

農研機構は気候変動に伴う花き生産の現状や対策をテーマにしたシンポジウムを開いた。温暖化で拡大する土壌病害の対策として、高知県農業技術センターの坂東卓弥氏が、低濃度エタノールを使った土壌還元消毒試験について報告。トルコギキョウの平均欠株率が1%未満に抑えられたと紹介した。

試験では、畝を立てた後、表面を十分に湿らせてフィルムで覆い、空気を遮断。そこに、低濃度エタノールを注入し、30度以上の条件で2、3週間程度密閉した。



低濃度エタノールによる土壌消毒後、11の試験地で一番花収穫時均15.8%あった欠株

率は、3年で同0.56%まで減った。坂東氏は「フィルムを取った後は土壌を動かさないことがポイント」として、畝を立てた後の消毒処理を勧める。

農研機構野菜花き研究部門の道園美弦氏は、施設での花き生産の高温対策について基本は「冷房、遮光、換気」で、追加としてヒートポンプの導入を検討してほしいとした。

電気代が上がる中、電気代を抑えるために終夜ではなく、日没後4時間の短時間冷房を推奨。終夜冷房に比べ、カーネーションでは採花本数が多くなり、バラではボリュームが増した例を紹介した。

同部門の中野善公氏は、高温による開花遅延が課題となる菊について講演。菊の特性や環境の影響を理解した上で、品種や環境制御技術の両方から対策してほしいと話した。

(後藤真唯子)

低濃度エタノールでの土壌消毒(高知県農業技術センター提供)